

インド仏教初期瑜伽行派の認識論に関する文献学的研究 —『瑜伽師地論』を手がかりに—

高 務 祐 輝

京都大学大学院文学研究科 博士課程

緒 言

認識論は仏教思想の根本に関わるテーマであり、仏教徒は認識 (vijñāna) というかたちではたらく我々の心の具体的なありようについて問題にしてきた。インド大乘仏教の一翼を担う瑜伽行派 (Yogācāra) は瞑想の実践を特に重視した学派として知られ、その瞑想体験をもとに認識に関する独自の思想を形成したとされている。同派では、我々の心に関して表層ではたらく6つの認識 (視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚と思考判断をとまなう意識) に加え、深層におけるはたらきとして新たにアーラヤ識などの認識を主張するようになった。このような独自の教説が注目を集めたこともあり、瑜伽行派の認識の問題をめぐるこれまでの研究は、アーラヤ識説に関連する研究に偏る傾向にあったといえる。しかしながら、それが確立する以前の初期瑜伽行派の段階において、インド仏教で伝統的な6つの認識に基づく理論をどのように受容し、どのような対象認識のプロセスを想定していたのかに関しては不明な点が多い。その解明は瑜伽行派独自の思想が形成される流れを把握するうえでも重要な鍵となることから、本研究ではこの問題の一端を明らかにするべく、最初期の瑜伽行派文献である『瑜伽師地論』(Yogācārabhūmi, 4世紀頃、以下『瑜伽論』)の中で「五識身相応地」(Pañcavijñānakāyasamprayuktā bhūmiḥ)と「意地」(Manobhūmi)の教説を中心に、特に認識の生起に関する同時性と連続性(プロセス)の面から考察を加える。『瑜伽論』において、両章は確立したアーラヤ識説が見られる「撰決択分」よりも成立が古い層(「本地分」)に含まれ、5種の知覚と意識をテーマに、密接に関連する内容を有する。認識に関する断片的な記述は同論書において多く見られるものの、知覚と意識が連続して生起する過程に関しては両章以外にまとまった解説がほとんど見られない。したがって、そのような観点で解説を行っている点がまず両章の大きな特徴であり、また、その内容は初期瑜伽行派の対象認識理論を窺ううえ

で非常に重要である。なお、このような資料が存在しながら当該箇所分析が十分に進んでいない一つの理由として、その既刊校訂本¹⁾に、時代的制約による誤りや問題点が散見されることが挙げられる。刊行から半世紀以上経過した現在まで、梵文写本との照合に基づく全面的な再検討ないし再校訂の試みはなされていない。

考察方法

まず、「五識身相応地」「意地」の解説を通して、両章で想定されている認識のプロセスを検討する。その際、両章の既刊校訂本に誤りが多いという問題を解消するため、現存の単一梵文写本およびチベット語訳と漢訳とを照合して独自に作成した信頼性の高いテキストを使用する。

次に、その検討結果をもとに『瑜伽論』における両章以外の断片的な記述と比較し、認識の生起に関する同時性と連続性について異同を検討する。比較する記述は、「本地分」の中で両章よりも古い「声聞地」(感官の抑制の解説箇所)と、「本地分」より新しい「撰決択分」中の「五識身相応地意地」(アーラヤ識の論証箇所)とである。従来指摘されている各箇所の成立順序を踏まえて比較することで、『瑜伽論』内部に確認される初期瑜伽行派の認識理論の特徴と展開を探る。

また、両章に見られる初期瑜伽行派の理解について別の視点から特徴を捉えるため、考察範囲を広げ説一切有部の文献と比較検討する。瑜伽行派は、説一切有部において体系化された瞑想法を下敷きにしていることが知られており、関連性が指摘されている。

結果および考察

「五識身相応地」「意地」の教説を分析した結果、両章は、同一人格において複数の認識が同時に生起する可能性を認めていない立場にあったと考えられる。この点に関しては、本研究課題に先行して拙稿²⁾において指摘

した。両章では複数の認識の同時性について直接言及せず、むしろ認識が生起する連続性について「知覚が連続して生起する可能性を否定し、知覚の直後には必ず意識が生起する」という立場を明確にしていることが知られる。今回の研究において両章の解説を改めて整理した結果を図示すれば次のようになるだろう。

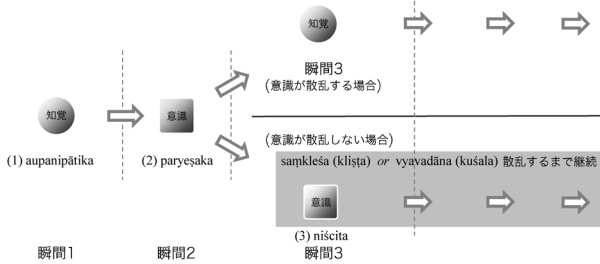


図1 「五識身相応地」「意地」所説の認識生起プロセス

次に、両章と、それよりも成立が古い「声聞地」を比較した。「声聞地」の記述では「知覚の直後に分別をとまなう意識が生起する」という点が強調されている。矢板氏³⁾が指摘する通り、ニカーヤの関連する教説と比較して、このことは「声聞地」において新たに見られる重要な特徴である。そしてこの特徴は「五識身相応地」「意地」においても同様に認められる。ただし、「声聞地」には、認識の同時生起を認めていると解釈しうる記述が存在し、矢板氏と山部氏⁴⁾の研究でも同時生起を認めている立場として理解する傾向が強く見られる。この場合、認識生起の同時性に関しては両章と立場が矛盾することになる。

しかしながら、本研究では「本地分」の他の記述の検討や、当該記述において同時性を示唆する saha という語の用例の検討により、同時生起を認める立場として理解する根拠が必ずしも決定的とまでは言えないこと、また、逆の可能性として、認識の同時生起を認めていない立場として理解することが不可能ではないことを確認した。紙幅の都合上その詳細な検討は別稿に譲るが、むしろ、『瑜伽論』内部に見られる教説の発展段階を検討した従来の研究成果を踏まえるならば、当該の一節に関して認識の同時生起を認めていない立場として理解しておく方が穏当であると思われる。今回の研究では、今後新たな根拠が提示されるまでは後者の立場として理解しておく方がより妥当性が高いであろうとの結論に至った。そのように理解する場合、「声聞地」と両章の教説に矛盾が見られないことは重要な点である。

次に、アーヤ識説の確立にともない、認識の同時生起を積極的に認めるようになる「撰決択分」の記述と比較を行った。「撰決択分」の段階に至ると、認識の同時生起に関する立場が変化するだけでなく、認識のプロセスに関しても「本地分」の両章で解説された立場が変化する。具体的には、「本地分」の両章では、知覚した対象を明瞭化するはたらきは知覚の直後に必ず生起する意識によるものと理解できるが、「撰決択分」では知覚と同時に生起する意識のはたらきとして明言ようになる。その根拠は、我々の日常において、意識のみがはたらいて過去を追憶する場合（認識が同時生起しない場合）は認識が不明瞭である一方、知覚と意識が同時にはたらいて現に対象を認識する場合（認識が同時に生起する場合）には認識が明瞭であるという経験的なものである。そして、こうした差は認識が同時に生起する場合とそうでない場合の両者を想定して初めて成り立つものであると主張する。Schmithausen氏⁵⁾も指摘するように、複数の認識の同時生起に関してはアーヤ識説の確立にともない教説の変化が知られている。しかし、その変化と連動して認識のプロセスの理解まで変化し、「本地分」の理解が引き継がれていないという点は今回の研究により明らかになった展開の一側面である。また、同一論書内のこうした理解の相違について、注釈書『瑜伽師地解説』(rNal'byor spyod pa'i sa rnam par bśad pa)において言及されており、後代の瑜伽行派において認知されていたことも今回確認された。

最後に、説一切有部の文献と比較を行った。説一切有部では認識の同時生起を明確に否定しており、この点は『瑜伽論』の「五識身相応地」「意地」と同じである。しかし、認識のプロセスに着目すると、『五事毘婆沙論』と『大毘婆沙論』において知覚の連続を認めている記述を確認できる。「五識身相応地」「意地」では知覚の連続する可能性を明確に否定していたから、この点に関して初期瑜伽行派と説一切有部の一部の者たちとは認識の連続性に関する理解が相違することが判明した。瑜伽行派の認識の問題に関する従来の研究では、アーヤ識説や、複数の認識の同時性を認めることなどが特徴として知られていたが、知覚の連続を認めないという点も初期瑜伽行派の段階における重要な特徴であり、インド仏教思想において対象認識理論を分類する1つの視点として新たに指摘できよう。

要 約

初期瑜伽行派の対象認識理論をめぐる、『瑜伽論』の「五識身相応地」「意地」の記述を中心に、同論書内外の記述と比較検討を行った。その結果、両章に先行する「声聞地」の記述とは矛盾なく理解できる可能性があることを確認した。その場合、両章における認識理論は「声聞地」に説かれるような修行徳目の実践を背景としている可能性が考えられる。この点については「声聞地」や「本地分」全体の中から、修行解説と認識との関わりを示す記述を注意深く抽出し精査する必要がある今後の課題とされる。

また、「撰決択分」においてアーヤ識説が確立することと連動し、認識生起の同時性だけでなく、連続性に関しても両章の理解が引き継がれていない可能性が高いことを確認した。このように「撰決択分」の前後で『瑜伽論』の認識論の基本構造に変化が生じた理由として、現時点では、新しい概念のアーヤ識の導入に主眼が置かれていたことが考えられる。この点についても、瑜伽行派独自の思想に関する多角的な視点から、さらなる検討が待たれる。

最後に、「五識身相応地」「意地」所説の初期瑜伽行派の立場と『五事毘婆沙論』『大毘婆沙論』所説の説一切有部の一部の者たちの立場とでは、認識の同時生起を認めない点では一致するが、認識の連続性に関して知覚

の連続性を認めるか否かという点で異なることが判明した。このことから、両章において知覚の連続性を明確に否定していることは、初期瑜伽行派の認識理論における大きな特徴として捉えることができよう。

本研究の成果の一部は、2014年11月開催の佛教史學會学術大会（於 佛教大学）において口頭発表し、同学会学術雑誌『佛教史學研究』において発表された。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より学術研究奨励金を賜りました。三島海雲記念財団の関係者のみなさまに心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) Vidhushekhara Bhattacharya: *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga*, Part I, The University of Calcutta, 1957.
- 2) Yuki Takatsukasa: *Journal of Indian and Buddhist Studies* 62(3), 1248–1252, 2014.
- 3) 矢板秀臣：成田山仏教研究所紀要, 26, 151–185, 2003.
- 4) 山部能宜：仏教文化研究所紀要, 28, 26–31, 1990. (渡辺隆生ほか「唯識論書における漢文用語の註釈的研究(II)」所収)
- 5) Lambert Schmithausen: *Ālayavijñāna, On the Origin and the Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy*, 2 vols., The International Institute for Buddhist Studies, 1987, pp. 45–46 (Reprinted in 2007)